

撤退学宣言 I (問題編)

—ホモ・サピエンスよ、その名に値するまであと一歩だ—

堀 田 新五郎

誰もがそれに不安を感じながら、しかし、誰もそれをテーマとして考察してはいない。もし、こうした状況があれば、知性はまずその不安を対象化し、対応すべき課題として提示する必要がある。今日、人々がこぞって取り上げるテーマとは「持続可能性」である。地球環境・地域社会・財政・社会保障・働き場所etc.、既存のシステム全般の「持続可能性」が問われ、持続のための処方箋が繰り返し繰り返し示されている。

逆に、誰もが不安を抱きながら、しかしテーマとして対象化されず、不安のまま放置されていること、すなわち、知性が今取り組むべき隠された課題、それは次のような疑問に表れてはいないか。「20年以上にわたり処方箋が示され続け、同時にまた、危機も深まり続けている。何故こうなってしまうのか?」「失われた10年は、失われた20年になり、30年となった。いつまで失われ続けるのか?」「今必要なのは持続や先送りの探求ではなく、困難であれ、『撤退』の探求ではないか?」

2019年、国連温暖化対策サミットにおけるグreta・トゥーンベリの発言が話題となった。彼女は、世界の首脳が発する「空虚な言葉」に対し、挑戦的に叩きつけた。「お金のことや、永遠に続く経済成長というおとぎ話ばかり、よくそんなことが言えますね!」。彼女の発言が話題となったのは、内容ではなくそのスタイルによる。16歳の高校生は、皆が薄々感じていることを、ストレートに激しく叩きつけたのである。各国首脳たちは次々と処方箋を提示し、約束する。だがその効果は空しく、事態は悪化を続ける。にもかかわ

マニフェスト

らず、似たような処方箋や約束が繰り返し繰り返し示されていく。この惰性は、いったい何だ？ いつか、後戻り不可能な地点を越えはしないか？ 今考えるべきは、次の処方箋や、個々の処方箋が効かない理由ではない。「惰性」それ自体である。合理的判断としては、これまでのやり方を停止し、撤退すべき場面にもかかわらず、次の処方箋、次の処方箋へと人々を押し流す「慣性の力学」とは何か。そのメカニズムを解明し、撤退の条件を探ること、これが今知性に求められる課題ではなからうか。

遠くから音が聞こえてくる。この先に大きな滝がありはしないか？ 誰もが不安を感じ、しかしボートは進み続けている。こうした情景は繰り返されてきた。このままでは米英との全面戦争に至る。その先は破局以外ではない。しかし何故、この明白な現実には立ち止まることなく、真珠湾を帰結させたのか？ サイパン陥落後、必敗にもかかわらず何故戦争を継続し、主要都市を焦土化させたのか？ あの震災後の議論はどこに消え、何故原発が、地震列島に続々と再稼働されていくのか？ 何故、秋冬には第3波が来ると分かりながら、「特措法」や医療・保健体制を改めることなく、「医療崩壊」を帰結させたのか？¹ いずれも、撤退すべき場面で、「慣性の力学」に流され続けた結果ではないか？ 今必要なのは、「持続可能性」への次の処方箋よりも、人々の思考を「持続」へと方向付けるメカニズムの解明にある。我々は、「慣性の力学」を明らかにし、知性としての撤退を論じよう。カタストロフィー前の方向転換、これが「撤退的知性の探究——『撤退学』の確立に向けて」と題された、本研究プロジェクトの目標に他ならない。

「慣性の力学」と対峙するために、我々はまず「神話の解釈」という観点を意識すべきではないか。持続不可能なシステム、そこから撤退すべきシステムを持続させようとするとき、政治家たちは「神話」を語り始めるからである。「皇軍不敗」「原発安全」「百年安心」「経済成長」「プライマリーバランス黒字化目標年」「地方創生」「復興五輪」、これらが神話的言説であることを皆薄々感じながら、しかし公にはこうした言説が流通し続けるのである。ここにメスを入れない限り、知性は慣性に負け続けるであろう。

以下我々は、【問題編(本号)】【解決編(次々号)】の2部構成により、撤退学

の必要性を論じる。本号【問題編】では、まず近代システム全般の機能不全や逸脱が確認され、次いで、にもかかわらずこのシステムからの脱出が不可能なゆえんを解き明かす。このシステムには、強大な「慣性の力学」が働いているからである。近代を批判しその「超克」を図る余多の試みは何故失敗したのか、「慣性の力学」の核心とは何なのか、それを考察したのち、再び、近代システムからの脱出可能性というアポリアを提示したい。論理的不可能を宣告されてもなお、倫理的に探究すべき問いもある。次々号【解決編】では、まず人間知性の特性が確認され、ついで知の構造転換という形で、【問題編】が提示した不可能な問いへの解答が模索されよう。

1. 近代システムとは何か？

我々がそのただなかにある COVID-19 によるパンデミックは、過去のそれとは大きく異なっている。地球全体への拡大の速さが桁違いであり、ワクチンの開発速度も分量もこれまでの常識を超えている。また、各国の感染状況・対応手段・その帰結について、同時進行的に、世界中の人々が大量の情報を確認し発信し論評し合うのである。これがグローバル化の進んだ今般のパンデミックの特性といえよう。そこでは、何よりも「速度と量」が圧倒的である²。無論これは、驚くにはあたらない。グローバリゼーションとは、西洋近代システムの地球的拡大であり、西洋近代システムは「スピードとマスの論理」に突き動かされているからである。以下、この点について、政治における民主主義、経済における資本主義、そして自然科学とテクノロジー、この3つの領域において確認しよう。その三位一体こそ、西洋近代システムの核心だからである³。

今世界中で、浄土教徒もムスリムも無神論者も、スマホをいじり、電子決算を行っている。何故か？ もちろん便利だから。テクノロジーはその人間の思想信条に関わりなく、万人にとって利便性がある。馬車よりトラックの方が、「ローコストかつスピーディで大量に」物を運ぶことができよう。それは「形式・手段」であり、「実質・目的」ではない。ゆえに、文化の違い価値観の違いを超えて、普遍的に妥当する。これに対し、「阿弥陀来迎」を信じるか

マニフェスト

「最後の審判」を信じるか、あるいは宗教を「集団神経症」と見なして否定するか、ここには、価値観の超えられない壁があるだろう。「実質・目的」が問題となるからである。ムスリムと無神論者が、贖罪と来世について同意できるとは思えない。だが、馬車よりトラック、郵便よりLINEが便利であることには同意できよう。「実質的・目的」が何であれ、「形式的・手段」は便利な方がよい。よって、浄土教徒もムスリムも無神論者も、日常の物品はAmazonで注文し、スマホで決済する。

ここにグローバリゼーションの秘密がある。グローバリゼーションとは、大航海時代から現在に至るまで、西洋近代システムの地球的拡大を意味しており、それを牽引し加速させているのは、資本主義とテクノロジーに他ならない。資本主義もテクノロジーも、「実質・目的」を問題にはしない。ゆえに、世界中に拡散する。何故、明治維新は成功し、日本は速やかな近代化を遂げたのか？ 解は無数にあらうが、ここでは次のように答えよう。近代化は、「実質・目的」の変更ではなく、「形式・手段」の変更として受入れ可能であったから。神代から連綿と続く「本朝」は不変である。尊王の「和魂」はそのままに、蒸気機関車・紡績工場・製鉄所・ガス・電気etc. つまりは「洋才」を「形式・手段」として採用する。それが、国家による資本主義とテクノロジーの導入、つまり「殖産興業」と「富国強兵」ではなかったか。では、もしもペリーが、天皇ではなく大統領の命に従えと強制したらどうか？ これは、他国から、アイデンティティすなわち「実質・目的」を強要されることであり、植民地化を意味しよう。その場合、西洋化・近代化への抵抗(=攘夷運動)は、収まらなかったに違いない。

この維新の例から何がわかるか。以下確認するように、近代システムの核心である民主主義・資本主義・テクノロジーは、いずれも「分析的知性」の産物であり、「実質・目的」ではなく、「形式・手段」の合理性に依拠している。しかし民主主義と、資本主義&テクノロジーとの間には明確な差異が認められるのである。「よりローコストかつよりスピーディでより大量に」、このあくなき利便性の追求、利便性の更新こそがテクノロジーの目的であり、そしてこの更新は、「利潤の増殖」という資本主義の目的達成に貢献する。「利便

性と利潤の最大化」、これが両者の目的であり、この目的は所与にして疑われないことがない。思考や批判の対象となるのは、最大化運動の内部における合理性のみであり、それは手段の最適化にすぎないのである⁴。

これに対し、民主主義はどうであろうか。以下、まずは科学・経済・政治を貫く近代の思惟様式、「分析的知性」と「形式・手段」における合理性について確認する。次いで政治の存在理由が、にもかかわらず「実質・目的」の探究であることを論じたい。

前近代において、真理は聖典や勅令のうちに書き込まれていた。全員を拘束する「正しさ」は、人びとを超えたその上に存在し、人々に下賜されたのである。これに対し近代は、神を殺し、王の首を切った。近代システムでは、「正しさ」は人びとの間に存在し、競争によって導出される。例えば、テクノロジーを支える近代科学において、真理が無媒介に与えられることはない。明確な始まり、アプリアリな真理が前提にされることなく、スタートはただ仮説たちの自由競争にすぎない。これらが、実験・観察による実践的検証によって篩いにかけてられ、勝ち残った仮説が暫定的に——つまり反証可能性に開かれつつ——真理として君臨するのである。誤謬たちを媒介に、真理は試行錯誤によって明かされていく。ゆえに、科学者が自分の学説を「絶対に正しい」と信じることは、どこか自己矛盾的となる。「信」をおくべきなのは、オブジェクトレベルでの「学説」ではなく、メタレベルでの科学的な「プロセス」に対してであろう。《仮説の提示 → 仮説の自由競争(実証実験) → 暫定的真理》これが科学の存在様態である。

では、科学に基礎づけられたテクノロジーはどうか。先に見たように、それは目的に奉仕する手段の領域と位置付けられる。ゆえに、それ自体として「良質」なテクノロジーは存在しない。その価値は、目的との関係性に規定され、汎用性(奉仕可能な目的の数)・コスト・速度・分量によって計られる。手段の領域では、「量」が「質」を規定するといえよう。例えば、近年話題となったスーパーコンピューター「富岳」について、理化学研究所計算科学研究センター長は語っている。「圧倒的に性能が高く(速度・量)、圧倒的に消費電力が低く、そして汎用性がある」。この最新テクノロジーは、富士山の

マニフェスト

高さ(能力)と裾野の広がり(コスト・汎用性)を兼ね備えたと称えられるのである。

以上、科学技術(科学とテクノロジー)について瞥見した。そこでは、「自由競争→真理」「プロセスへの信」「真理の暫定性」「量が質を規定」といった諸特性が認められる。以下記述するように、この特性は資本主義・民主主義にも確認することができよう。すべて「分析的知性」の産物だからである。

では、資本主義について。テクノロジーと同じく、古代ギリシャ以来経済は、基本的に手段の領域と位置付けられてきた。確かに、「善」や「正義」がそれ自体として目的となりうるのに対し、「財」はそれを使って何を為すかが重要であり、「財の増殖」そのものを目的とするのは、ありがちとはいえ倒錯という他はない。また、「科学者コミュニティにおける仮説の自由競争」に信をおくのが科学とすれば、資本主義は、「市場における商品・価格の自由競争」に信をおくシステムである。すなわち、「マーケットの自由競争を勝ち抜いたもの=大量に売れたもの」が暫定的に「良い商品」となり、結果、全員を拘束する「スタンダード」が形成される。例えば、Windows95とは何であったか。それまで日本語ワープロソフトには、良質な商品が複数存在していた。しかし、Windows95が市場をロックオンしてからは、使い勝手の悪いWordがスタンダード化され、誰もがそれを使用する破目に陥ったのである。交換価値(量)は使用価値(質)を凌駕する。

ともあれ、科学技術と同様、資本主義にもまた「自由競争→スタンダード」「プロセスへの信(市場メカニズム=神の見えざる手への信頼)」「スタンダードの暫定性」「量が質を規定」といった諸特性を認めうる。以下最後に、民主主義について確認しよう。

ヴォルテールの有名な言葉がある。「君のその意見には断固反対だが、君がその意見を言う自由は命がけで守ろう」。彼は何をいつているのか? 民主的立法行為の精髓を語っている。「正しさ」は、もはや聖典や勅令に刻まれてはいない。ならば、まずは全員が、それぞれに意見表明する他はない。そして議論を尽くし、多数決でルール決定する。《全員の意見表明→熟議→多数決→ルール》これ以外に、やり方があるか? 王・神官・貴族・平民・非人

たちから成る階層的秩序は解体された。全員がindividualへと還元されたならば、上記プロセスを経た意見を「正しい」と見なす他はあるまい。これが所謂「善(good)に対する正(right)の優位」である。善(good)は「実質・目的」を表す。ゆえに、各人、各共同体の価値観に従って万別となる。ならば、プロセス的な正しさ(right)を優先させ、諸々の善たちを自由競争させなければならない。勝ち残った善こそが、暫定的に「全員にとっての善=法」として、人々を従わせるのである。これがrule of lawの精髓といえよう。

ここでもまた、「自由競争→法」「プロセスへの信」「法の暫定性」「量が質を規定」という諸特性を見出しうる。というのも、最後が多数決である以上、「質」を決定するのは、「票の多寡」という「量」だからである。教養と責任感にあふれた市民の意思も、付和雷同の輩の意思も、個の1票としてカウントされざるをえない。それが民主主義なのである。

以上、科学技術・資本主義・民主主義それぞれが、「分析的知性」に基づく「自由競争パラダイム」に貫かれていることを確認した。「個々の仮説」「個々の商品」「個々の意見」は、その背景——科学者の国籍や企業の財務状況や有権者の知性——から切断され、自由競争の篩にかけられる。「我が国初のノーベル賞!」「社運を賭けた商品!」「美人すぎる候補者に1票!」、こうしたhuman too humanな意味や背景は捨象され、形式的なゲーム(真理獲得ゲーム・利潤獲得ゲーム・票獲得ゲーム)が構成されていく。それを導く抽象の力が、「分析的知性」に他ならない。

しかし先に触れた、資本主義&テクノロジーと、民主主義との差異にも注目すべきか。3者とも「分析的知性」と「競争パラダイム」に貫かれている。しかし、前2者の追求する「財」や「技術」があくまでも手段であるのに対し、民主主義は目的の領域の守護者である。ヴォルテールは何に命を賭けていたのか? 個別の意見ではなく、形式的プロセスに対してであった。民主的プロセスは単なる手段ではなく、「人権」という目的の具体化なのである。人間の尊厳を守り、他者を尊重すること、人権思想を語るは易く、行うは難し。他者性の承認とは、己の狭さへの覚醒だからである。よって、民主的熟議のプロセスは、あらゆる個人の尊厳にとって不可欠の地盤となろう。そこでは

マニフェスト

まず、己の狭さや蒙昧を疑うこと、すなわち全員の意見表明による他者たちの声への聴従から始まるのである。ヴォルテールはメタレベルで戦っていた。敵は対立する意見の持ち主ではない。オブジェクトレベルでの意見の対立は、よりよい「正しさ」にとって必要な過程である。戦うべきは、民主的なプロセスの破壊者、地盤の侵害者であろう。プロセスは単なる制度ではなく、そこには他者たちの声が、人間の尊厳が肉化されているのである。分析的知性は、人々を individual へと還元した。しかし、individual はゲーム上の 1 プレイヤーではなく、それぞれが独自の声（「声なき声」を含めて）を発する価値の源泉に他ならない。民主的プロセスは、価値や目的の領域と不可分である。

以上、民主主義・資本主義・テクノロジーの同一性と差異について論じた。この三位一体が、近代システムの核心であるが、以下節を改めて、今度はシステムの暴走を確認しよう。それは、「手段の自己目的化」として現れている。

2. システムの暴走と「近代の超克」

近代的システムがうまく機能するためには何が必要か？ いいかえれば、「自由競争」というスタートから、暫定的ではあれ「正しさ」というゴールに至るためには何が必要なのか？ 民主主義の場合、「最善の法」という「質」を生み出す方法として、「議会での熟議→多数決」というプロセスが提示される。だが、多数決は所詮「量」による決定であり、それが想定通り十全に機能するためには、政治家たちが地元や業界の利益ではなく、公益を考えて議論を尽くし、その後諸々の圧力に左右されず、主体的に投票しなければならない。自律した行為者による理性の公共的使用、これが民主的プロセスを支える基軸である。

資本主義や科学技術にも同じことがいえよう。市場は仁愛（benevolence）ではなく、自愛（self-love）の集積であり、かつ公益を生むとアダム・スミスはいった。「私的利益→市場メカニズム→公益」という経済プロセスを支えるのは「神の見えざる手」であり、また科学技術において、「私的仮説→科学者コミュニティ→真理」というプロセスを支えるのは、「仮説の合理的検証」で

あった。いずれ、近代システムが十全に機能するためには、自由競争が「神」や「理性」によって制御されなければならない。アプリアリな典拠から始めない以上、「正しさ」導出過程における、アポステリオリな「普遍化原理」が必須なのである。

これを欠くとき、システムの均衡は崩れざるをえない。議会は数の暴力装置と化し、市場は拡大不均衡を加速させることとなる。ゆえにロックは、その寛容論から無神論を除外し、ヴォルテールは「もし神が存在しなければ、創らねばならない」と論じた。近代システムが機能するためには、各員の内に「神＝普遍化原理」が埋め込まれる必要がある。

ならば近代システムは、行為者たちに《存在の二重性》を要請しているのではないか。自己の立場を生きると同時に、自己の立場から撤退し、利害を離れた「公平な観察者(impartial spectator)」でもあれと迫るのである。科学の場合、これは現在でも一定程度保たれているといえよう。科学的法則を自己都合で捻じ曲げることは難しい。データの改ざん等、しばしばエゴイスティックな研究不正が問題になったとしても、真理の客観性は、科学者たちに「公平な観察者」であることを強いるのである。だが、テクノロジーとなるとすでに怪しい。政治や経済の都合で、安全性や倫理性の客観的基準が揺らいでいき、十分な検証や規制がなされないまま技術のなし崩し的運用が進む事例が後を絶たない。科学者の倫理的責任が問われるゆえんである。

政治・経済に目を転じれば、事態の深刻度は格段に高まろう。真実(truth)ではなく「post truth」が時代を象徴する言葉となる現代、何でもありのこの驚くべき時代において、「自由競争パラダイム」が、暫定的であれ「正しさ」(truth)を生み出すはずはない。勝ちさえすればいい。これが現代の時代精神ではないか。「公平な観察者」への撤退という知的契機は失われ、政治家は自分ファーストを隠さず、官僚は偽データに依拠し、企業はタックスヘイブンを追求する。もはや経世済民という言葉を知る者はなく、政治・経済は、エゴセントリックな「票獲得ゲーム」「利潤獲得ゲーム」に墮したのである。これにテクノロジーの「利便性獲得ゲーム」が加わる時、近代システムの暴走、すなわち「手段の自己目的化」の総体が現れる。票・利潤・汎用性・コスト・

マニフェスト

スピード・マス、これらはすべて「量」であり、目的ではなく、手段の領域を構成する。これらが目的へと転じられたとき、システムは人間に奉仕するのではなく、人間をシステム化するのである⁵。

何故、こうなったか？ これを語るには、少なくとも19世紀・20世紀の200年を語らねばならず、我々にその余裕はない。ここではただ、近代システムが機能するためには、「神＝普遍化原理」が必須であったこと、にもかかわらず、ニーチェのいう「神は死んだ、遺言なし」という事態に陥ったこと、システムが想定する自律的・理性的行為者は夢想にすぎず、現実には付和雷同する大衆の世になったこと、これを指摘するにとどめる。この150年の偉大な思索家は、皆独自の視点から、この事態について語っているのである。

では、我々は何をすべきか？ 近代システムの暴走にどう対処すべきなのか？ この150年は、システムのグローバル化が加速した時代であり、同時に、近代のラディカルな克服が試みられた時代である。とりわけその試みは、共産主義・ファシズム・原理主義として現れた。マルキストは、「手段の自己目的化」という倒錯を精緻に分析し、逆立ちした近代社会の再転倒を企て、ファシストは、議会の民主的プロセスを否定し、カリスマ的指導者と大衆との熱狂的な結合を演出したのである。そして原理主義過激派は、競争の結果生まれる「暫定的正しさ」に我慢がならず、近代システムに対し、神の絶対性に基づくテロルの一撃を振り下ろした。

で、どうなった？ システムは加速を続け、「近代の超克」という試みは、すべて敗れ去った。何故か？ それぞれの敗北について詳述する時間も紙幅もない。シンプルに、以下の点だけ指摘しておこう。マルクスのヴィジョンがどうであれ、現実のマルクス主義はファシズムと同じく、一党独裁を選択し、議会と市場における自由競争を否定して、党の意思に基づく政治・経済を構築した。すなわち、「正しいこと」が、カリスマ的指導者や党中央委員会の声明に、常に既に書き込まれている世界を選択したのである。原理主義は言うも更なり。名称が明かすように、それは、聖典の一字一句を揺るぎない真理と崇める世界を意志したのである。近代の超克をラディカルに志向する運動は、期せずしてpost-modernではなく、pre-modernへと回帰してしまっ

たといえよう。ここに、敗北の根源を見ることができないか。

ともあれ、挑戦者はすべて退けられた。近代システムは加速を続け、主客の転倒した世界は拡大と深化を止める気配はない。選挙、つまり民主のプロセスの地盤、個の尊厳の具体化であり不可侵である地盤、それが、民主主義のリーダーを誇るアメリカ大統領選挙で蔑ろにされた。ヨーロッパでもポピュリズムが跋扈し、中国・ロシアは権威主義を強化するばかりである。日本でもまた、選挙のたびに、有権者の関心第1位は景気対策となっている。政治が経済の従属変数である限り、資本主義(手段の追求)の暴走を、民主主義(目的の追求)が制御するのは不可能であろう。これが今日の世界である。ゆえに、1%の人間に99%の富が集中する事態が、民主国家の金融センターにおいて出現する。「なんだそりゃ? 民主国家なら、99%の人間の意思が国家の意思となり、この奇天烈な格差は解消されるはずだ!」この当然の怒りが、皮肉にもドナルド・トランプを大統領に押し上げる力となり、結果、ますます奇天烈な分断と格差と怨嗟が、世界に蔓延していくのである。

どうしたらいい? どうやったら、この流れから脱け出せる?

3. 「慣性の力学」からの脱出可能性?

この150年、近代社会の超克を図る理論と実践は枚挙にいとまがない。にもかかわらず、システムが疾走を続けるのは何故か? 資本主義とテクノロジーの結合が、かくも強力なのはどうしてなのか? 我々は、この問いに対して、以下2点を仮説的に提示したい。①資本主義&テクノロジーは、危機を養分とする乗り越えの運動だから。②危機を養分とする乗り越えの運動は、人間の快楽に適合的なゲームだから。では、これについて確認しよう。

近代システムが「競争パラダイム」に貫かれているならば、平時より有事、安定より危機が競争をあおり、システムを活性化させるのは論を俟たない。政治・経済・テクノロジーの暴走は、戦争・恐慌・環境破壊を繰り返してきた。しかし、成熟社会や定常経済、slow lifeやLOHASが幾度唱えられても、人々がシステムからの撤退を選択することはなかった。その黎明期から今日にいたるまで、近代は常に近代批判を内在させつつ疾走を続けたのである。

マニフェスト

例えば、環境破壊はこれまでの生のスタイルからの転換を迫る。しかしそうした状況を、資本主義&テクノロジーは、イノベーションのチャンスと捉え、システムのバージョンアップで乗り越えていく。決して撤退はしない。むしろ嬉々として、次のステージへのレバレッジに利用するのである。今、「脱炭素社会」という言葉が踊っている。この流行語からは、これまでの生のスタイルへの真摯な反省や、近代システムからの撤退意志を感じ取ることはできない(表層的反省は巷にあふれているが)。化石燃料から自然エネルギーへ、ガソリン車から電気・水素自動車へ、どの国・どの企業がいち早くステージを更新し、利潤獲得ゲームに勝利するか、「グリーン・ニューディール」は「グリーン・バブル」の様相を呈している。すべからく近代人は、システムからの撤退ではなく、加速において危機の乗り越えを図るのであろう。そして、更新されたテクノロジーは、次のステージで、必ずや新しい危機を生み出すこととなる。ゆえに、資本は眠ることができない。嬉々として、新しい危機に挑み続けるのである。

我々は、ここに資本主義&テクノロジーの魅力を看取すべきか。このシステムは『少年ジャンプ』やRPGに酷似する。ステージを更新する度に、パワーアップした新たな敵が登場する。様々な新兵器やイノベーションを駆使し、ライバルたちと競争・協働しつつ、知恵と勇気と術と絆をつかって、敵を倒しステージを乗り越えていく。これが面白くないはずがない。資本主義&テクノロジーは、人間の快樂に適合的なゲームといえよう。ただしラスボスは存在しない。したがって、正しくエンドレスに、ゲームからの脱出は不可能なのである。我々はようやく、「慣性の力学」の核心に迫りつつある。

「競争パラダイム」に貫かれた近代システムは、社会活動の総体をゲーム化する。票獲得ゲーム・利潤獲得ゲーム・偏差値獲得ゲーム・内定獲得ゲーム・配偶者獲得ゲームetc. では、ゲームという事象の特性は何か。1つには、ゲーム内部において、プレイの目的が所与で自明な点に求められる。「ゲームの勝利」以外、目的は存在しようがない。プレイヤーは知力を駆使し、獲物をゲットする。だがその思考は、ゲーム内部で、オブジェクトレベルの課題(獲物のゲット)にロックオンされており、決して、ゲームそのもの

を疑うことはない。ゲームを疑う視点、「このゲームつまらん、やめた」という心の声、「ゲームやめ！宿題！」という母の声、つまり「ゲームキャラ＝プレイヤー」にとって他性の声は、ゲームの外から、リアルな人生からしか届いては来ないのである。

であれば、近代システムが有する「慣性の力学」の正体も明らかとなろう。システムが、社会活動の総体をゲーム化していくとき、プレイヤーにとって、各種ゲームの網の目から脱け出し、外部に立つことは不可能のように思える。というのも、このゲームは実人生であり、外がないから。他者たちが、各種ゲーム内の「キャラ＝他のプレイヤー」に転化している限り、主人公をゲームの外部へと覚醒させる声、他性の声は存在しようがあるまい。このエンドレスゲームのどこに出口が見出せるのか？ やめられないとまらない「慣性の力学」の正体とは、他性の不在に他ならない。

思えば、大日本帝国もまた、B29という他性なくして「慣性の力学」から抜け出すことはできなかった。だがそれはむしろ、「カタストロフィー前の方

向転換」ではない。我々は今、カタストロフィー以外の他性を、どこに見出せばよいのか？ どこから、覚醒の声が聞こえてくるのか？

では、【問題編】の最後に、以下の問いを提出しよう。

【問題】

第1問：面白さについて

近代システム以上に、人間の快樂に適合的なやり方は存在するか？ もっと面白い道はありうるのか？

⇒ 「競争パラダイム」に貫かれた近代は、社会活動の総体をゲーム化し、その結果、分断・格差・環境破壊など深刻な課題を生み出してきた。しかし、その解決も近代システムで行い、更なる深刻な課題を生む他ないのか。確かに、近代の歪みをもたらした課題の解決にあたり、王道とは、歪みを正して当初の近代的理念を実現させることであろう。つまり、自律的・理性的な市民を育成し、「啓蒙未完のプロジェクト」を完遂させるのである。だが、このやり方は、真面目過ぎないだろうか。多くの人々にとって、『少年ジャンプ』

マニフェスト

やRPG以上に魅力的だろうか。啓蒙のプロジェクトは、大衆的面白みを欠く限り、未完のまま終わるように思える。

これまでの近代批判は、問題の立て方を間違っていた。問題は、より正しい道の追求ではなく、より楽しい道の追求ではなからうか。だが、そのような道は存在するのか。

第2問：リアルについて

人生＝ゲームからの脱出路、リアルライフからの撤退可能性をどこに見出したらよいのか？ いや、撤退してもよいのか、人生から？

【解決編】は次々号。はたしてホモ・サピエンスは、知の構造転換を果たし、その名に値する存在となることが可能なのか？ 乞うご期待。

注

- 1 パンデミックが現在進行形である今日（2021年3月初旬）、日本政府をはじめ各国政府が実施した感染対策の総体を評価するのは時期尚早といえよう。ただし、現状でも明確な問題として指摘可能なのは、本文で触れたように、日本において第1波（2020年3月～5月）から第3波襲来（2020年12月）までの間に、「特措法」改正や医療・保健体制の構造転換をはじめ、大規模感染を前提とした具体的施策を講じてこなかった点である。これは、目の前に滝があると分かっているながら落下した直近のサンプルではなからうか。
- 2 グローバリゼーションとは、人・モノ・金・情報の国境を越えた移動であるが、人とモノ（ワクチン）はサイバースペース上を光速で移動できない。ゆえにパンデミック下、観光産業は大打撃を受け、ワクチンはなかなか日本人には届かない。金は、それがgoldである限り、実在性に阻まれ光速移動が不可能となるが、マネーである限り、人為的な記号すなわち情報にすぎず、光速で地球上を駆け巡り、カジノ資本主義の土壌を形成する。今後テクノロジーの進化は、間違いなく人やモノも情報化していくことであろう。

人間がそこで暮らしているこの世界は、意味の網の目で構成されている。このお茶熱い、美味しい、不味い、すべてが意味である。そして、それらの意味は、畢竟大脳の刺激において構成された情報にすぎない。テクノロジーの進化は、「意味＝情報」を電脳空間で操作する方向へと進むのではないか。40～50年前のマンガには、自動車やバイクが空を自在に飛び回る未来が描かれていた。だが、テクノロジーはそうした方向には進化しない。物理的空間で

はなく、VRにおいて、人々の欲望を叶えるのである。何故か？ むろん、その方が圧倒的に便利だから。ドラえもんは愚かにも、「タケコプター」「グルメテーブルかけ」「きせかえカメラ」等々の道具を、一つ一つ集めている。だが、考えるがいい、ドラえもん。「もしもボックス」一つあれば、すべてが事足りるのではないか？ 世界の意味が脳の刺激に還元可能ならば、物理空間とVRを区別すべき本質的な理由はない。「もしもボックス」が作るパラレルワールドも、この世界と完全に等価なのである(むろん、「もしもボックス」が作る世界を、VRと同一視することはできないが。しかし、逆にいえば、「もしもボックス」が作る世界をVRと同一視するならば、この万能の道具でさえ、恐ろしいことに現実化可能なかもしれない)。

物理的リアルとVRとの関係性、これが今般のパンデミックで問われた課題であり、同時に、テクノロジーの将来が突きつけてくる問題である。例えば、1、2年前の人間が、現在の街に突如タイムスリップしてきたらどうだろうか。はじめは違いに全く気がつかない。だが、次第次第に違和感を覚え、ついには叫ぶだろう。「全員がマスクをしている！」この光景は、ハリウッドSFが繰り返し描いたテーマを想起させる。生き延びた人類は皆、バラバラに地下基地に隠れ(ステイホーム)、電脳空間で交信している。リアルな物理空間は危険地帯であり、特別な装置(マスク)なしには歩くことすらままならない。ではこの世界で、身体はどうなるのか？ 身体の「濃厚接触」にともなう喜びはどうなるのか？ いささかチープとはいえ、このテーマは、「リアル=身体=唯一性」と「VR=脳の刺激=無限コピー可能」との対比を浮上させる。これをどう考えるのか、これは確かに今日的な課題ではあるだろう。

- 3 以下、近代システムをめぐる記述は過度の単純化を恐れず、ラフスケッチに徹した。本稿は学術論文ではない。「撤退学宣言」という маниフェストの観点から、近代システムの問題性を抽出することのみに論を絞っている。
- 4 もちろん、現在の企業にとって社会貢献も大切な使命なのかもしれないが、エゴイスティックな利潤追求ではなく、CSRを高らかに謳う企業が続出している。しかし実際のところ、CSRの前景化でブランドイメージを高めないと、利潤追求の妨げになるからが、彼らの本音だったりはいらないか？ 確かに、個人的に善人で慈善活動に邁進する資本家も存在してはよい。だが、マルクスがいうように、資本主義の構造力学は、否応なく資本家と労働者を対立関係におく。ここでは、個々の善意は何らの解決にもならない。あるいはまた、そうした善意そのものが、資本主義がもたらすコンプレックスの効果にすぎないと、深層の心的メカニズムにメスを入れれば解明可能かもしれない。

いずれにしても、資本主義の基本構制が変わらない以上、個々の資本家・企業がどのような社会的責務を果たそうと、資本の運動は、構造力学的に富の偏在をもたらす。現今の金融資本主義が、1%の人に99%の富を集中させていくのも偶然ではあるまい。果たしてこうした状況を、「経世済民」と呼べる

マニフェスト

であろうか。

- 5 結果、我々はいたるところで急き立てられている。孫子は、戦いの本質を速度と看破した。「競争パラダイム」が支配する社会、すなわち「戦いが常態」となる社会では、スピードが勝敗を決するのである。よって、学生も教員もビジネスパーソンも子どもたちも、皆が皆、急き立てられることとなる。ある者は受験に、ある者は就活に、ある者は競争的資金の獲得に、ある者はノルマ達成に。論文は学位のため、学位は就職のため、就職は金銭のため、金銭は豊かさのため、そのためには昇進、そのためには数値目標クリア、そのためには…(A for B for C for D for…)我々は常に、その次、その次、その次、その次へと急き立てられていく。何故「現在」を生きるのではなく、「未来」を生きようとしているのか？ 何故、24時間ネットに接続し、光速で情報交換しなければならぬのか？ 我々は実は、暴力にさらされているのではないか？

なるほど日常生活において、この一杯のお茶と一期一会に遭遇することは至難の技である。何ものかの手段に堕せず、味わうために味わうこと(A for A)、ただ達人のみが「現在」を汲みつくす術を知るのかもしれない。ならば、我々は、達人からも学ぶべきではなからうか。「急き立て」という暴力からの撤退可能性について、また「現在」を生きる術について、我々は達人に教を請うべきである。

『撤退学宣言Ⅱ』（解決編）で論じるように、撤退学は、仏道・茶道・華道・武道など、「道」からの学びを根本に据えている。アカデミズムと「道」の融合、これもまた、新しい知の転換と捉えることができるのではないか。